

# 2026年2月8日（日）公現後第5主日 銀座教会 新島教会 主日礼拝（家庭礼拝）

## 礼拝招詞

「全地よ、主に向かって喜びの声をあげよ。喜び祝い、主に仕え、喜び歌って御前に進み出よ。」

（詩編100編1－2節）

## 主の祈り

交説詩編 詩編91編1～5節

いと高き神のもとに身を寄せて隠れ

全能の神の陰に宿る人よ

主に申し上げよ

「わたしの避けどころ、砦 わたしの神、依り頼む方」と。

神はあなたを救い出してくださる

仕掛けられた罠から、陥れる言葉から。

神は羽をもってあなたを覆い

翼の下にかばってくださる。

神のまことは大盾、小盾。

夜、脅かすものをも

昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。

## 使徒信条

讃美歌 195（いのちの君にます主よ）

列王記上19章1～18節

01 アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。02 イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言わせた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていかなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように。」03 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、04 彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」05 彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」06 見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。07 主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。08 エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。09 エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」10 エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」11 主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起り、山を／裂き、岩を碎いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起った。しかし、地震の中にも主はおられなかった。12 地震の後に火が起った。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。13 それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」14 エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。

た。ところが、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」15 主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。16 ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。17 ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。18 しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

## 牧会祈祷

天の父なる神様。

主の恵みによって一週間の歩みを終えて、あなたの御言葉を聞きます。わたしたちの心にあなたの靈が豊かに注がれ、今週も新たな力をお与えください。病気や試練の中におられる方々を、心に重荷を負っておられる方々を、あなたが支え、励ましてください。主イエス・キリストの十字架によって罪を赦されて神の子とされた者として、あなたの栄光を表す器として私たち一人一人を用いてください。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

説教 「静かにささやく声」副牧師 川村満

本日私たちに与えられました御言葉は、預言者エリヤの物語です。エリヤは、大勢のバアルの預言者たちとの戦いに勝利しました。主がエリヤと共におられ、天からの火が降って神の臨在の力を表されたのです。そのように、神の力を与えられて主に用いられたエリヤですが、本日読みました19章ではエリヤは全く別人のように弱くなってしまっています。いったいどうしたのでしょうか。エリヤがしたことを夫のアハブから聞いたイゼベルは怒り狂って言いました。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように！」イゼベルから命を狙われていると知ったエリヤは、これまでの勇ましさはどこにいったのか、途端にひどく恐れて、直ちに逃げたとあります。どこまで逃げたのかというと、北イスラエルというイスラエル北部から南に下り、ベエル・シェバという南ユダの最南端の町であります。預言者エリヤともあろう人がどれだけ怖がっているんだと思います。カルメル山での戦いの時とはまるで別人のようです。ある学者は、このときのエリヤは心の病にかかっていたのではないか。鬱の状態であったのではないかと語っています。4節でエリヤは「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。」と言って死ぬことを願うほどであります。なぜエリヤがここまで弱くなってしまったのかはよくわかりません。しかしここからわかることは、エリヤは決してどんな苦しみにも耐えることができるような強靭な精神の持ち主ではなかったということでありましょう。これまでエリヤが力強く歩んでこられたのはただ神の力を注がれていたからであります。エリヤ自身は、わたしたちと同じ弱い人間なのです。体力にも精神力にも限界のある普通の男であったのです。ある人が言うには、エリヤはこれまで神だけを見つめていた。だからエリヤは大きな力を受けて戦うことができたのだ。しかし人間の権力や暴力の現実を見ると途端に力がなくなってしまう。嵐の湖の中で、主イエスを見つめていたときには湖を歩くことができたのに、強い風に気が付いて怖くなった途端に沈んで溺れかけたあの使徒ペトロと同じことがエリヤにも起こったのだ。そのように語る人もおります。そうであるかもしれません。あるいは、エリヤはこれまでの働きを自分一人の戦いだと思っていたのではないか。自分一人で戦わなければならぬなら、いくら頑張っても先が見えない、そのような戦いの中で心も体もすぐに疲弊し、限界を知らされていきます。

実に私たちもまたこの時のエリヤのように、精神的にも肉体的にも限界を感じて、もう駄目だ、これ以上やつていける自信がないと思うことがあるのではないでしょうか。エリヤは逃亡の旅の途中で疲れ果てて、えにしだの木の下で横になって眠ってしまいました。すると御使いが来てエリヤを励します。御使いはエリヤに触れて言いました。「起きて食べよ」なんとエリヤの枕もとには、焼いたパン菓子と水の入った瓶がありました。神の御使いがエリヤに力を与えるために用意してくださったものであります。エリヤはそのパン菓子を食べるとまた横になりました。主の御使いは再度、食事を用意してくれました。そこで御使いはエリヤにこのように優しく語りかけます。「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐えがたいからだ」そのようなことがあってエリヤは四十日四十夜という長い時を、ひたすらに歩き、神の山ホレブに着いたのです。なぜエリヤ

が、長い時間をかけてこの聖なる山までたどり着きたいと願ったのか。ひとつはそれが神の導きによるものであったのでしょう。御使いが語るように、神の山ホレブへと神御自身がエリヤを導いたのでしょう。エリヤは、自分の働きが挫折したと感じていました。自分は先祖にまさる者ではない。アブラハムやモーセのように神の御心に生きることができる者ではない。そのような劣等感と挫折感に苛まれながら、それでも神の御心を問い、これから自分の歩みを導いてくださる神からの御声を聞きたいと願ったのであります。とうとう、エリヤは神の山ホレブに到着しました。しかしホレブに着いたエリヤは、山の山頂に向かったのではなく、洞穴に入り、そこで一夜を過ごします。まるで洞穴は、エリヤの暗い心を表しているかのようです。わたしたちも、恥や悲しみや、失望の中で、穴があれば逃げ込みたいと願ったときはなかったでしょうか。誰にも会わず、心を閉ざして一人になりたいと願う。そのようなことは人生の中で幾度かあるのではないでしょうか。エリヤもまたそうでした。しかしエリヤはその洞穴の中で、主からの御声を聞きます。

「エリヤよ、ここで何をしているのか」エリヤはおそらく、これまでの戦いの中で、孤軍奮闘してきた、という自負心があつたことでしょう。しかし力尽きました。その思いが彼の言葉からわかります。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」この言葉の中には、自己憐憫や、神への不平、訴えにも思えるような思いがあつたかもしれません。なぜ一所懸命に働いた私の働きは、これほどにうまくいかないのか。なぜ私はこれほどに苦しみ、途方に暮れているのか。わたしはこれ以上はあなたのためには働くことはできません。もう十分ではないでしょうか。そういう思いがあつたかもしれません。わたしたちもまたそのような思いに打ちひしがれることがあるのではないか。自分の願い通りに進まない人生。わたしなりに頑張ったけれども、さまざまな失敗をしてしまった。私と一緒に働いてくれなかつた人たち。私の思いを汲んでくれなかつた仲間たち。そういう思いを持つこともあつたかもしれません。エリヤはそのようなわたしたちの思いを代弁して主に語っているかのようです。

しかしそのようなエリヤに主は言われます。「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい。」主なる神は、エリヤに、私の御前に立ちなさいと命じられるのです。そこには有無を言わせない迫力がありました。外を出ると、主が通り過ぎて行かれます。激しい風。山を裂き岩を碎く嵐のような風が吹きすさびます。しかしそこには主はおられません。風の後に、地震が起ります。しかしその地震の中にも主はおられませんでした。そのあとに火が起きました。しかし火の中にも主はおられませんでした。ときに天変地異は神の裁きを表すとも考えられます。津波や大地震が起こった時、その被災地に赴き、これは神の裁きだから、今こそ神の御前に悔い改めなければならないと言った人たちがいたそうです。けれどもそういう伝道が功を奏したかというと、おそらくキリスト教に対する不信感を煽るような、逆効果になったことの方が多いかもしれません。天変地異には、何らかの意味があるとは思います。しかしそれ自体が神の御心ではないのです。このような出来事の後に、「静かにささやく声」が聞こえてきました。その声に耳を澄ますために、エリヤは洞穴から出てきます。エリヤはそこで自分の心の中にうずくまることをやめて自分の外に出ていくのです。するとその静かなさやく声はこうエリヤに告げました。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」そこで語られる御声は前と同じ言葉です。主はもちろんエリヤがそこで何をしているのかなど十分に承知しておられました。主がそこでエリヤに語られるのは、ただ、エリヤが本当に主の御前に立つためであります。エリヤはすでに主を知っていたつもりでいました。天の御使いから助けを与えられてホレブまでたどり着いたのも主の導きであることを知っていました。しかしながらお主の御前に、本当の意味で立ってはいなかつた。わたしたちもまたそういうことがあるのではないか。神を信じている。神の導きも感じている。しかしどこか、心が穏やかにならない。神の導きを信頼しきってゆだねることができない。なぜうまくいかないのかという思いの中でどこかで神様への不満が生じている。信頼しているからこそ生じる不満もあります。信仰に生きようとするゆえに、神の御心が分からず辛いのです。でもそのような思いの中でわたしたちもまた、まだ本当に神の御前に立ち、神の御声を聞くことができていないのではないか。わたしたちもまた、礼拝の中で、あるいは密室の中で、日々新たに、神の御前に立たなければならぬのです。

主の御声は同じことをエリヤに語ります。「ここで何をしているのか」エリヤは答えます。これまでの歩みを、ここでの不満や悲しみ。自分一人だけが取り残され、神の民であるはずの人々が自分を殺そうとしている

ことの悲しみを訴えます。そのこともしかし主は十分にご存じでありながら、全てを包み込んでエリヤを御自身の御前に立たせます。そして新たな使命。ハザエル、イエフ、エリシャに油を注ぎ、王と預言者にすることを命じます。これは預言者エリヤにしかできない大切な使命であり、彼らがエリヤの後を継いで、新しい時代の神の使命を担う者とされるのです。エリヤに命じたイスラエルの宗教改革の目的は彼らによって達成される。そして神の御業は時代を越えて続くのです。このように神の御計画は、人間の罪を越えてはるかに深く成し遂げられていきます。そしてその神の救いのご計画は、御自身の御子、イエス・キリストによる救いへとつながっていくのです。エリヤは、ここで新たに力を与えられました。エリヤは、自分が頑張らないとどうしようもない。自分には力がない。イスラエルの道はもはや暗澹たるものだ、そういう絶望や悲しみの中にあったかもしれません。けれどもそのようなエリヤの思いを越えて神が常にイスラエルを導いてくださるという希望の道が開かれました。そしてエリヤは最後の働きとして、ハザエル、イエフ、エリシャの三人に油を注ぐためにダマスコに向かいます。

主は最後にエリヤに言われます。「しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」このバアルの偶像崇拜に染まったイスラエルに、まことなる神に忠誠を尽くす人々。偶像に膝を屈めず、口づけをしない人々が七千人もいるということを告げてくださいました。これはエリヤにとって驚きであり、大きな喜びであったのです。エリヤは一人で戦っていたのではないのです。もはやイスラエルに純粹な信仰などどこにもないと思える中で、神は全ての者の心の奥を見抜いておられ、七千人を残しているとはつきり告げてくださったのです。だからエリヤの働きには報いがある。そしてエリヤは安心して次の世代の人々に働きを委ねることができます。

わたしたちもそうなのです。わたしたちの人生におけるさまざまな働きには欠けも失敗も不完全さもあったことでしょう。うまくいかなかつたこと。隣人との軋轢などもあったことでしょう。わたしの思いを受け入れてもらえなかつた悲しみがあつたかもしれません。もう一度やり直せたらやり直したいと願うようなこともあつたかもしれません。けれどもなおそれでも、わたしたちはその働きを主の恵みの御手にゆだねて良い。なぜならその欠け多き働きの中にも主がわたしたちと共におられ、わたしたちの働きを祝福の内に導いてくださつていたからです。一人で頑張っていたのではないのです。主がわたしたちを導いてくださつたからこそこれまでの歩みが支えられていたのです。その恵みに気付かされること。それが、主の御前に立つということあります。

しかしあしたちの歩みは、仕事や子育てなどの第一線から退いてなお続きます。私たちのキリスト者として主を証しする歩みは、わたしたちの命の息が途絶えるその瞬間まで続きます。私たちにはなお、隣人を祝福する役目が残っています。ハザエル、イエフ、エリシャを祝福し、油を注ぎ、神の御前に使命を与えたように、わたしたちは家族を祝福し、人生で出会う隣人を主なる神の御下に導くためのとりなしの祈りをささげる役目がなお残っております。やがてわたしたちの歩みが終わりを迎える、天に凱旋するその日まで、なお与えられている日々を、いつも主の御前に立ちつつ、この世界のために。人々の祝福のために、祈り続けていきたいのです。お祈りをいたします。

天の父なる神様。弱く乏しい者でありながら、わたしたちをあなたの御前に立たせてください、わたしたちは今日も十字架の恵みの下に罪の赦しと永遠の命の下に感謝と讃美をささげます。どうかわたしたちが日々新たにあなたの御前に真実に立ち、あなたによって新たな力を得る者とならせてください。そしてその恵みに立ちつつ、人々を祝福する者とならせてください。体に弱さを覚えておられる方々、重荷を負っておられる方々を励まし、癒しと力を与えてくださいますように。礼拝に集うことのできない全ての兄弟姉妹の心にも聖霊なる主よ豊かに臨んでください、今日を生きる力を与えてくださいますように。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

讃美歌 222 (あめなるつかいのうたは)

献 金

頌 栄 544番

祝 椅 仰ぎこいねがわくば 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、  
あなたがた一同と共に とこしえに豊かにあるように。アーメン